

※下記「文法の確認」の課題を行う。

本文(前回と同内容)

日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は帰し給ひて、惟光朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも、持仏据多奉りて行ふ尼なりけり。簾少し上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いと悩ましげに読みあたる尼君、ただ人と見えす。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかな、とあはれに見給ふ。

清げなる大人二人ばかり、さては、童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて、うつくしげなるかたちなり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」とて、いと口惜しと思へり。このゐたる大人、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。烏などもこそ見つくれ。」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後ろ見なるべし。

尼君、「いで、あな幼や。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば、何とも思したらず、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」とて、「こちや。」と言へば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。さるは、限りなう心を尽くし聞こゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

尼君、髪をかき撫でつつ、「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとはかなうものし給ふこそ、あはれに後ろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿におくれ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。ただ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ。」とて、いみじく泣くを見給ふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

またあたる大人、「げに。」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬまにいかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにや侍らむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将の、瘡病まじなひにもし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び給ひければ、知り侍らで、ここに侍りながら、御訪ひにもまうでざりける。」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ。」とて、簾下ろしつ。

「この世にのしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へ忘れ、齡延ぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえむ。」とて立つ音すれば、帰り給ひぬ。

あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすき者どもはかかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ、とをかしう思す。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

本文現代語訳（前回と同内容）

日もまことに長いうえに、なすこともなく退屈なので、（光源氏は）夕暮れのたいそう霞んでいるのに紛れて、あの小柴垣のもとにお出かけになる。供の者たちは（都に）お帰しになって、惟光朝臣と（小柴垣の内を）おのぞきになると、ちょうどこの（目の前の）西に面した部屋に、持仏を安置申し上げてお勤めをする（それは）尼なのであった。簾を少し上げて、花をお供えするようである。中央の柱に寄りかかって座り、脇息の上に経を置いて、ひどく大儀そうに読経している尼君は、並の身分の人とは思えない。四十を過ぎたくらいで、まことに色が白く上品で痩せているけれども、頬はふくよかで、目もとの辺りや、髪が可憐な感じで切りそろえられている端も、かえって長いものより格別に当世風で気がきいているものであるよ、と（光源氏は）しみじみと心ひかれてご覧になる。

こぎれいな年配の女房が二人ほど、それから、女の童が出入りして遊んでいる。その中に、十歳くらいであるうかと思えて、白い下着に、山吹襲（の上着）などで着慣れて柔らかになつていゝる上着を着て走ってきた女の子は、大勢見えていた子どもたちとは比べようもなく、成人後（の美しさ）はさぞかしと思いやられて、見るからにかわいらしい容貌である。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして（豊かであり）、顔は（泣いた後らしく）手でこすってひどく赤くして立っている。

「何事ですか。子どもたちとけんかをなされたのですか。」と言って、尼君が見上げている顔立ちに、（その子と）少し似ているところがあるので、（尼君の）子であるようだ（光源氏は）ご覧になる。（女の子は）「雀の子を犬君が逃がしてしまったの、伏籠の中に閉じ込めておいたの。」と言って、いかにも残念だと思っている。そこに座っていた年配の女房が、「いつものように、うっかり者（の犬君）が、こういう不始末をしてお叱りを受けるなんて、本当に嫌なことですね。（雀の子は）どちらへ参りましたでしょうか、本当にだんだんかわいらしくなってきたというのに。鳥などが見つけでもしたら大変です。」と言って立って行く。髪がゆつたりとしてとても長く、見苦しくない人のようである。少納言の乳母と人が呼んでいるらしい（この）人は、この子の世話役なのであらう。

尼君は、「本当にまあ、なんと幼いこと。子どもっぽくていらつしやいますね。私のこのように今日明日と思われる命を、何ともお思いにならないで、雀を追い回していらつしやるとは。（生き物を捕らえるのは）仏罰を被ることになりますよいつも申し上げておりますのに、情けないこと。」と言つて、「こちらへ（いらつしやい）。」と言つと、（女の子は）膝をついて座った。顔つきが実にかわいらしくて、眉の辺りが（眉毛を抜いていないために）ぼんやりと煙つて、あどけなく（髪を）払いのける額の様子、髪の生えぐあい、とても愛らしい。（光源氏は）これから成人していく様子を見ていたい人だなあ、と目がとまりなされる。それというのも実は、このうえなく心を込めてお慕い申し上げるお方に、実によく似申し上げていることが、思わず見つめられる（理由な）のであった、と思うにつけても涙がこぼれる。

尼君は、（女の子の）髪をかきなでながら、「櫛ですくことを嫌がりなされるけれども、きれいな御髪ですこと。本当にたわいなくていらつしやるのが、不憫で気がかりです。これくらい（の年齢）になれば、全くこんなふう（に幼稚）でない人もありますのに。亡くなった姫君は、十歳ほどで殿（父君）に先立たれなされた頃には、しっかりと物の道理をわきまえていらつしやいましたよ。たった今にでも私が（あなたを）お見捨て申し（て死んでしまつ）たならば、どうやってこの世に生きておいでにならうとするのでしょうか。」と言つて、ひどく泣くのをご覧になるに

つけても、(光源氏は) わけもなく悲しい。(その女の子は) 幼心にも、やはり(しんみりして) じっと(尼君を) 見つめて、伏し目になってうつむいた時に、(顔に) こぼれかかってくる髪の毛が、つやつやとしてみごとに美しく見える。

これからどこで生い立っていくのかも分からない若草のようなこの子を後に残して消えていく露の身の私は、消えようにも消える空もありません。(死ぬにも死にきれませんよ。)

また(そこに) 座っていた年配の女房が、「本当に(そうです)。」と泣いて、

若草の生い立っていく将来のことも分からないうちに、どうして露は消えようとするのでしょうか。(それまでは生きていらっしやいませ。)

と申し上げているところに、(尼君の兄の) 僧都が向こうから来て、「こちらは(外から) まる見えではございませんか。今日に限って端近においてですな。この上の聖の所に、源氏の中将が、瘡病のまじないにおいでになったことを、たった今聞きつけました。たいそうお忍びでいらっしやったので、知りませんが、ここにおりながら、お見舞いにも参りませんでした。」とおっしゃると、(尼君は)「あら大変。本当に見苦しい様子を誰かが見てしまったかしら。」と言って、簾を下ろしてしまった。「世間で評判が高くていらっしやる光源氏を、このような機会に拝見なさいませんか。俗世を捨ててしまった法師の心地にも、すっかりこの世の心配事を忘れ、(見ただけで) 命が延びると思われるほどの(美しい) ご容姿なのです。さあ、ご挨拶を申し上げます。」と言って(僧都が座を) 立つ音がするので、(光源氏は) お帰りになった。

何とも可憐な人を見たことだなあ、こうだから、この色好みの人たちはただもうこのような忍び歩きをして、めったに見つけられないような人をもうまく見つけるといっわけなのだ、たまに出かけてさえ、このように思いもかけないことを目にするものだよと、おもしろくお思いになる。それにしても、実にかわいらしい子であったなあ、どういう人なのだろう、あのお方(＝藤壺の宮)のお身代わりとして、明け暮れの心の慰めにでも見たいものだ、と思う心が(光源氏の中に) 深くとりついてしまった。

○文法の確認

上記本文から傍線部が引かれた十箇所を抜き出してノートに書き写し、動詞・助動詞について授業と同様の文法的説明を行う。各自調べて学習を進める。

例 マ四用 存続体

ラ下二用

霞み たる に 紛れ て

※ 「給ふ」など敬語が含まれる場合は、種類(尊敬・謙讓・丁寧)と誰から誰への敬意かも確認する」と。

○前回課題の解答・解説

1 内容の整理

- ①尼 ②女房 ③十 ④雀の子 ⑤藤壺の宮
⑥見つめる ⑦僧都 ⑧簾 ⑨挨拶 ⑩慰め

2 基本

- 1 (1)きょうそく (2)ふせ (3)めのと (4)みぐし
(5)そうず (6)しょうそ
2 (1)上品だ。 (2)かえって。 (3)当世風で華やかだ。
(4)不愉快だ。 (5)感じがよい。 (6)いる。
(7)幼い。子どもっぽい。 (8)見つめる。
(9)心配だ。 (10)先立たれる。
(11)参上する。伺う。 (12)評判が高い。

3 読解

1 ア

【解説】動詞「おぼゆ」は「似ている」の意。「少しおぼえたる」ところあれば「子なめり」という推定の根拠となっている。「尼君の」の「の」は主格を表すので、「見上げ」ているのは尼君である。

2 少女が伏籠に入れておいた雀の子を、犬君が逃がしたこと。

【解説】少女の訴えを聞いた女房が、犬君がしでかしたことへの非難を込めて「うっかり者が、このようなことをして」と言っている。

3 (1)イ (2)イ (3)ア (4)カ (5)ウ

【解説】主語が明記されていない文が多いが、場面ごとの登場人物を正確に把握し、話の流れや敬語の使われ方にも着目して、主語を明らかにしながら読もう。(1)尼君と呼ばれて、ちよこんと座った。(2)光源氏が少女の美しさに引きつけられ、自分の思慕する人(藤壺の宮)に似ていると考えている場面。(3)「いみじく泣く」のは尼君であり、その様子を光源氏がのぞき見している。(4)僧都の会話文中で、丁寧語だけが使われているので、僧都自身の行為について述べたもの。(5)謙譲語「奉る」で「見る」対象である光源氏への敬意を、尊敬語「給ふ」で「見る」主体への敬意を表しているので、僧都が尼君に「(光源氏を) 拝見なさいませんか。」と誘っていることが分かる。

4 いみじく生ひ先見えて「一二四・七」

【解説】直前の「つらつきいとらうたげにて…いみじうつくし。」「一二六・四」は、少女の美しい容貌を描写したもの。これを見て光源氏が「ねびゆかむさまゆかしき人かな(成長していく様子を見ていたい人だなあ)」と思っている。将来たいそう美しい人になるだろうという期待が持てる容貌ということである。最初に少女に注目した場面に、同様の表現がある。

5 少女を見つめてしまうのは、最愛の人、藤壺の宮に似ているからだと思いき、藤壺の宮に対する切ない思慕に浸っている。

【解説】直前に「と思ふにも」とあるが、そこで思ったことそのものは「涙」を誘うような内

容ではない。「藤壺の宮」が意識に上ったことで、宮に対する思いがあふれてきて、感極まっているのである。

6 イ

【解説】「かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを。」は、「これほどの年齢になれば、全くこんなふうではない人もいるのに。」の意で、雀を逃がされたと言つて泣いている少女の幼さを嘆いての言葉。その後、少女の母である「故姫君」について「十ばかりにて…いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。」「一二七・一」と述べているのは、「かからぬ人」の実例を挙げたものである。

7 ①死ぬ ②行く末 ③心配（気がかり）

④少女の行く末を見届ける ⑤生きていて ⑥女房

【解説】「生ひ立たむ…」は尼君が、「初草の…」はそばにいた女房が詠んだ歌。「若草」「初草」は少女を、「露」は尼君をたとえたものである。「生ひ立たむありかも知らぬ」と「生ひゆく末も知らぬ」は、ほぼ同義で、幼い少女の行く末は現時点では分からないことを表している。尼君は「若草をおくらす露」であると自覚しながらも、「消えむそらなき」、つまり安心して消えることができないと感じている。一方、女房は「いかでか露の消えむとすらむ」と詠み、「露は消えてはなりません」という思いを込めている。

8 そばに置いて、藤壺の宮の代わりに毎日見て、恋しくつらいつらい心の慰めになりたいと思つてゐる。

【解説】「かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや」「二二八・七」から考える。「ばや」は自己の願望を表す終助詞。

9 髪的美しさ。（髪が豊かで艶があること。）

【解説】尼君、少女、少納言の乳母ともに、髪に関する記述が多い。当時は髪的美しさが、女性の「美」の重要な要素であった。